

入選 北海道 野口 千悦 様 (50 代 女性)

御とし八十一才。年金生活を送る私の両親の日常はかなり忙しいようだ。父は週 3 日のポスティングのアルバイトで足腰を鍛えて、こづかいを稼ぐ。町内会の活動にも積極的に参加し、リーダー的な存在となっている。母は自治体が推奨する体操教室に足しげく通い健康管理に余念がない。若い頃から陶芸が趣味で、今は小さな陶器のアクセサリーを作っている。娘の私が言うのも何だが、なかなかのクオリティーである。気に入って買ってくれる友人も多いのだそうだ。手先の器用さは未だ健在。食事もすべて母が賄う。外食などほぼしないのだ。実にストイックな 2 人である。少々やりすぎではないかと心配したりもするが、彼らはいたって真剣なのだ。どうやら娘夫婦に迷惑を掛けまいと必死らしいが、私としては切ない気持ちにもなる。しかし、今まで貫いてきた人を頼らない彼らの生き方を尊重する事にした。年金受給日ともなれば 2 人でいそいそと出掛けてゆく。この日は彼らにとって 2 ヶ月に一度の重要かつ特別な日なのだ。スーパーの買い物かごを一杯にして楽しそうに買い物する 2 人の姿を偶然見かけ、私の胸はキュンとなった。買い物は脳に良い刺激を与えてくれる。心を豊かにし、幸せな気分させてくれる元気薬のようなものだ。こんな時代だが、長生きをする事にどうか罪悪感を持たないで欲しいと願う。波乱万丈の人生を頑張って生き抜いてきたご褒美を頂いているのだと思って。そんな彼らにはつらい過去を乗り越えてきた自負がある。随分昔の話になるが、父は経営していた会社を倒産させてしまうのだ。莫大な借金を抱え住む家を追われて、彼らは故郷である北海道の地を離れていった。都会の片隅で日々をしのぐように生きてきた不遇の時代。先の見えない不安に押し潰されそうな毎日を必死に堪えた。母は心労から心臓の病を患った。そんな時でも必死に働き年金を納めていた事は驚きである。そして彼らに転機が訪れる。年金の受給年齢を迎えたのだ。故郷へ帰りたい気持ちを抑えながらの、^{つい}終のすみかを見つける最後の大きな決断だった。帰っておいで。私はその頃、北海道の音更町と言う小さな町に夫と 2 人で暮らしていた。子供もおらず、両親を見守っ

てゆける心の余裕があった。もう十分でしょう。これからは故郷の地で心穏やかに過ごして下さい。人に頼るのを嫌う昔かたぎの父が、初めて娘を頼ってくれた。そして彼らのおかしくもちよっぴり切ない年金生活は、まだしばらく続きそうだ。私の両親は今、年金制度の恩恵を受け暮らしている。だが、これからの時代を生きる若者達にとって今の制度が決して安心出来るものだとは思えない。勿論、今の高齢者のような手厚い制度が将来も続くことは難しいであろう。若い頃は自分の老後の事などあまり想像しないものだから、年金を払い続ける事の意味を見失ってしまう。しかし、年金を納める事が国民の義務であるならば、その義務を果たし続ける事こそが、私達の心豊かな老後に繋がるのだという事を、どうか信じさせて欲しいと切に思うのです。私の両親がそうであるように。